

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500830

研究課題名(和文) 高等学校における性の健康教育の実施に向けた養護教諭の資質能力の向上の研究

研究課題名(英文) A Study of Measures to Promote Sexuality Education by Yogo Teachers in High Schools

研究代表者

鹿間 久美子 (SHIKAMA, KUMIKO)

京都女子大学・家政学部・教授

研究者番号：40589727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：高等学校養護教諭の性教育における意識と取り組みの実態を明らかにし、養護教諭と校内連携者である教諭との比較を行い、性教育推進に向けた方策を検討することを目的とした。結果、養護教諭は性に関する包括的な捉え方をしていた。また、性教育を行うことで、「生徒に良い変化が期待できる」と考え、現状の課題解決にとどまらず、生徒の将来を見据えた性教育の必要性を認識していることが示唆された。一方、性教育のための時間確保や他者からの理解が得難い、または自身の教授法に不安を持ち、集団指導に困難感を抱いていた。そこで、調査結果を基に、「性教育推進における段階別確認進捗表」を作成し、その活用を提案した。

研究成果の概要(英文)：This study is to discuss measures to promote sex education in high school through clarifying the high school yogo teachers' awareness of and efforts for sex education, as compared with other teachers and teachers who were collaborating with yogo teachers at school. As a result, yogo teachers acquired a comprehensive understanding of sex. In addition, yogo teachers apparently thought that "they could expect positive changes in students" by providing them with sex education and recognized the need for sex education that would not only help resolve students current problems but also focus on their future. Meanwhile, yogo teachers faced difficulties in securing time for sex education as well as obtaining other people's understanding. They were not confident of their own teaching method, feeling difficulty in group guidance. We, therefore, developed a "Step-by-Step Progress Checklist for the Promotion of Sexuality Education" based on the survey results and proposed its use by yogo teachers.

研究分野：応用健康科学

キーワード：養護教諭 高等学校 性教育 推進 コーディネート

1. 研究開始当初の背景

わが国における若者の性行動は多様化複雑化し、学校における積極的な、性感染(症)を含む性に関する教育の重要性が説かれているものの、積極的な性に関する教育は行われていない状況がうかがわれる。特に高等学校を対象とした多くの調査では、小中学校に比べて、年間計画が作成されていない、委員会の設置や校内研修の実施率が低い、積極的な教育実践が行われていない、という現状が報告されている。

このような高等学校の現状の改善には、2008年の中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について」で、「学校保健活動の推進における中核的な役割、コーディネーターの役割など(略)」の健康教育活動の推進者として養護教諭の大きな役割が期待されているため、養護教諭を、性の健康教育推進者として資質能力を高め、活用する方策に注目した。そこで、先行研究では性教育に関する具体的な教育内容や詳細な実施状況と養護教諭の関わり方が明らかではなく、具体的な改善には至らなかったため、それらを明らかにすること、中核的な役割を担う養護教諭の資質能力の向上が早急に求められている。

2. 研究の目的

高等学校におけるこれまでの性教育の実態について、養護教諭が関わっている内容を詳細に把握して課題を検討した後に、養護教諭が中核となって各自の学校で効果的な性の健康教育を推進できるような方策を具体化することが目的である。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

東北、関東甲信越、北陸地方の各県に位置する、Y県、N県、G県、T県、の4県316校の公立高等学校に勤務する各校の養護教諭1名と、養護教諭が校内連携者として選択した保健体育科等性教育の中心的役割を担う教諭1名を調査の対象とした。

(2) 調査方法

無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙調査票は、選択式および記述式で回答を求めた。質問紙の内容は、先行研究を参考に、研究者らで独自に作成し、予備調査を実施した後に、調査項目を決定した。

調査に当たっては、4県の養護教員会に質問紙配布の了解を得た後に、養護教諭宛に校内連携者として保健体育科等教諭1名の選定を依頼した説明書を同封し、調査用紙には返信用の封筒を添えて、養護教諭用と教諭用の2部を配布した。調査は、すべての対象者に同様の内容で記入を依頼し、記入後にそれぞれが返信用の封筒に入れて郵送にて回収する方法とした。なお、調査期間は2012年10月～11月である。

(3) 調査内容

属性(勤務する学校種、生徒数、年代、勤務年数、性別、職種)、研修会参加(過去1年間)図書や電子書籍の購入(過去1年間)、保健学習、集団指導、個別指導の実施(過去1年間)、効果的な集団指導が行える担当者、性教育に関する意識11項目を調査した。

(4) 集計と分析

対象者の属性と実態、性教育の拠り所または、参考にしている「書籍や資料」等では、回答が得られた養護教諭と保健体育科教諭、その他の科の教諭別に集計し、統計パッケージSPSSver.19forWindowsを使用し、Fisher直接確率計算法により比較した。危険率5%未満($P < .05$)を有意とした。また、性教育の集団指導の記録、個別指導の記録については、対象とする学校の重複を避けるため、養護教諭の回答に限って単純集計を行った。

4. 研究成果

先行研究においては、高等学校の校内研修実施率について低い傾向が指摘されているが、本調査では、高等学校において、「小・中学校のように性教育の年間指導計画の作成がされていない」ことや、委員会の設置などの「組織体制が十分とは言えない」、等の状況がうかがわれた。これらのことから、養護教諭の資質能力の向上という視点にとどまらず、高等学校の特質を踏まえて、養護教諭が性教育を確実に進めるための取組の方策について、検討する必要があると考えた。

前述の先行研究は、M県内の養護教諭と保健体育科教諭を対象に行った調査であったため、汎用性を高めるために、今回は4県を対象として調査した。また、この保健体育科教諭の調査では、「県内保体科教諭研修会の席で配布し、回収を行った」と報告されているため、養護教諭との関わりは把握できていない。そのため、本研究においては、養護教諭が校内連携者として選択した、性教育に理解があり、担当教科においても性教育に関わる内容を積極的に取り扱っていると思われる、保健体育科等の教諭との比較を試みた。以下、考察を加える。

(1) 性教育に関する研修状況

従来から養護教諭は、性教育に関する研修会の機会が多いことが指摘されていて、本調査においても教諭に比べ、養護教諭の研修会参加率は高かった。従って、養護教諭は研修の機会を多く与えられているばかりではなく、積極的に参加している状況がうかがわれた。例えば、日本家族計画協会の「思春期保健相談士」認定制度では、33,000人を超す受講者があり、認定者の約8,000人の内で、11.5%を養護教諭が占め、その他の教職員は2.0%に留まっていて、養護教諭が大きく上回っていた。また、性教育の図書や電子書籍の購入においても、養護教諭は教諭に比べて、非常に高い購入状況が見られた。このことは、養護教諭が自身の研修のために購入している

ばかりではなく、日常的に対応する生徒のニーズや、彼らから受ける質問に対する参考資料として購入している状況がうかがわれた。

このように、養護教諭は性に関しても保健室における相談活動などを通して生徒の本音と接する機会が多いことから、性教育に関する研修会へ積極的に参加し、書籍の購入も行っていて、性に関する学びを重視していることが明らかとなった。特に、性教育の拠り所または参考にしている「書籍や資料」を見ると、「セクシュアリティ」のキーワードを選択していて、この用語を用いた回答者は1名を除き、すべてが養護教諭の回答であった。このことから養護教諭は、性についてWHO/WASによるセクシュアリティの定義で示されているように、限定的・部分的ではない包括的な性の捉え方をしていることが明らかになった。

(2) 性教育に関する意識

養護教諭は性教育に関する研修を積み重ねていて、性教育に強い関心を持っていた。また、教諭との大きな違いは、「性教育を行うことで、生徒に良い変化が期待できる」と考えていたことである。このことは、目の前の性に関する課題解決にとどまらず、生徒の将来を見据えた性教育の重要性を認識していることが分かる。以上のように、生徒の性に関する理解を促し、対処能力を向上させるなど、性教育の効果に期待感を持っているという特徴がうかがわれた。

しかしながら、養護教諭は、性教育推進における根強い困難感を持っていて、積極的に推進し難い状況が見られる。最も強い困難感とは、性教育を行う時間確保であり、このことは先行研究の指摘と同様の結果であった。

養護教諭にとって、時間確保のハードルはかなり高い状況がうかがわれた。また、他の教員や保護者からの理解が得難いと回答し、性教育の必要性は強く感じているものの、性教育の企画・発案段階で困難感を持ち、性教育の推進に当たっては挫折してしまうことも危惧される。

一方、養護教諭自ら学級や学年を対象とした集団指導を行うことについても困難感を持っていて、集団指導を計画する段階においては、教諭に比べて、具体的に展開方法をイメージできない等、教授方法に関する不安を持っていた。以上のことから現時点においては養護教諭が、直接集団指導の講師になることを一律的に推し進める段階ではないように思われた。

さらに性教育の教授法などは、養護教諭の養成段階や現職研修における学びの環境を整備し、充実させていく必要性が示唆された。

(3) 性教育の実施状況と効果的な指導における担当者の選択及び課題

2010年12月から2011年1月に行われた養護教諭対象の層化抽出法による全国調査の結果によると、学級活動で保健指導を実施している養護教諭は、小学校70%、中学校37%、

特別支援学校52%で、高等学校は14%と極めて低い状況であった。一方、保健指導の内容を見ると、小学校と特別支援学校では、「歯・口」が多く、中学校と高等学校では、「性に関する指導」が半数以上を占めており、「性に関する指導」を養護教諭が担当している状況がうかがわれた。本調査は学級を含む学年および全校生徒のいずれかを対象とした集団指導で、学級に限定した結果ではないものの、44.9%の養護教諭が行っていると回答していた。

一方、保健学習へのかかわりにおいて前述の調査では、小学校36%、中学校14%、特別支援学校12%、高等学校4%であった。本調査では43.8%が保健学習にかかわったと回答していたが、講師として教科を担当している養護教諭は見られなかった。

次に、性教育の集団指導の現状を見ると、70%以上の高等学校において性教育の集団指導が行われていた。具体的な状況では、主に、特別活動の時間を活用し、学年毎に年1回の実施が多かった。このことは、先行研究でも同様の状況が見られ、高等学校の現状では、複数回学年毎の集団指導の時間確保は困難な状況がうかがわれた。

また、性教育の年間計画が「ある」では、先行研究では9%に止まっていたが、本調査においては半数を占めていた。しかしながら、多くは年1回の学年における集団指導の実施を挙げていたことから、本調査においても性教育の講演会を学校行事へ位置付けるにとどまっていて、学校教育全体を網羅した性教育の年間計画ではないことが推測できる。

一方、集団指導における企画は、保健部が担当していた(91.0%)。また、養護教諭は概ね校内連携ができたと回答していた。このことから、高等学校における集団指導は、養護教諭が所属する保健部において計画され、養護教諭が何らかの形でかかわっていることが示唆された。

なお、集団指導における、事前事後調査も20%程度の学校で行われていて、その内の6割以上は記述式だけにとどまらず「項目選択式」との混合方式を取り入れ詳しい調査が行われていた。

(4) 養護教諭の性教育推進に向けた取り組みにおける方策

調査結果に基づいた養護教諭の性教育推進に向けた支援策の検討

学年を中心とした「性教育の集団指導の効果が上がると考える担当者」について、養護教諭は外部講師や教科担任を挙げていて、自身が適任であるとは捉えていなかった。また、すでに述べてきたように、養護教諭が集団指導の講師となることについては現時点では一律に推し進める段階に達してはいないようである。

しかしながら、「子どもの性的健康の保障と全校の性教育推進の要としての養護教諭の学内における位置づけ(ステータス)を見

直し、教員間や外部講師とのコーディネーター役としても十分に活躍してもらおう」と期待する意見もある。これらの社会的な要請に対応するためには、本調査で明らかになった、養護教諭の持つ性教育に対する、高い意識や積極的な学びの特徴を生かして、高等学校における性教育の推進者としての機能が十分果たせるような方策を検討する必要があると考えた。

そこで、本調査の結果を踏まえ、表 10 のように「養護教諭の性教育推進における段階別確認表」(以下、確認表と記述する)の作成を試みた。本確認表作成の目的は、養護教諭自身をヘルスプロモーションの視点からエンパワメントし、「子どもたちの性の健康を作り出す主体は『私である』という自覚が持てるようにバックアップする」ことにより、少数職種としての「遠慮」や「不安」を払拭して、性教育の推進者として自信を持つことができるように支援することである。

ここでいう養護教諭の「遠慮」や「不安」については、本調査の結果のみならず、養護教諭のコーディネーションに関する先行研究においても指摘されている。

例えば、高等学校教職員におけるコーディネーション行動の調査や、養護教諭のコーディネーションに関する調査を見ると、どちらも養護教諭は自己のコーディネーション能力について低く評価する傾向が見られ、それらは、能力や権限の自己評価が低い原因の一つに起因すると指摘されている。また、養護教諭は職務上の連携を行う際には葛藤を抱いていて、それらの改善のために人間関係の中でも、特に同僚との連携に関する側面が重視されていた。そして、養護教諭のインフォーマルな役割が、コーディネーション行動を左右することも示唆されていた。なお、コーディネーションについて日本養護教諭教育学会では、「多様な分野の個人や組織が、同じ目的に向かって、異なる立場でそれぞれの役割を果たしつつ、互いに連絡を取り、協力し合って取り組むことである」と定義している。

さらに、養護教諭の所属学校種別の分析では、高等学校の養護教諭のシステムコーディネーション行動としてのマネージメント力や情報収集力が低く、小・中学校との間において有意差が見られた。このことは、高等学校の性教育が、小・中学校に比べて積極的に実施されてこなかった一因と考えることができる。

なお、確認表では、養護教諭の性教育推進におけるコーディネーションについて、「性教育推進に向けて、初期段階ではインフォーマルな諸要因を活用し、学校集団の中で必要な協調行動を活発にすることによって、性教育の効率性を高めることができるように、徐々に学校組織活動に移行するプロセス」とした。

一方、エンパワメントは、適切な日本語

訳が難しく、一般的には「力をつけること」と理解されている。例えば、太田は、「社会的な弱者が、自分自身あるいは他者の援助によって、自信と尊厳の回復、能力の取得を行い、他人からのコントロールから解放され、自分で意思決定を行えるように社会の関係を変革していく身体的、心理的、社会的、経済的、政治的パワーなどを獲得していくプロセス」と定義し、そのプロセスの第 1 段階は「気付くこと」、第 2 段階は「次の段階で行動を起こすための能力獲得」、第 3 段階は「行動を起こす」として「女性のエンパワメントのプロセスと側面」の図を示している。

そこで、養護教諭をバックアップし、エンパワメントする方策として、太田の考え方を参考に、本調査結果に基づいて確認表を作成したのである。以下、段階別に説明を加えたい。

第 1 段階として、養護教諭の気付きや課題意識から始まり、次の第 2 段階で校内連携者として選択した教諭らとインフォーマルなレベルにおいて校内連携をスタートする。

生徒の状況や研修内容及び書籍など、炉辺談話的に様々な情報交換を行い、性教育の必要性について共有を行う。その後、関連教科の担任を含めて情報交換の輪を広げる。そこでは、調査の実施を申し出る教科担任が現れたり、担当のクラスの調査を養護教諭が後押ししたりできる。調査票の作成に当たっては養護教諭がアドバイスするなど、研修で培った知識や経験等を活用して、自校の生徒に適した内容を選定する。調査結果を集計して資料を作成する。連携者と検討し課題を共有し、全校的な取り組みについて提案する。ここまでがインフォーマルな段階における校内連携である。この段階で可能であれば保健部のメンバーが存在することが望ましい。なぜならば、最初の一步を踏み出して、次の一步につなげる段階で挫折しないためにも、ともに組織に働きかけるプロモーターが必要だと考えたからである。

そして第 3 段階では、性教育の組織的な活動へ移行し、作成した資料を基に、全校生徒の調査実施を提案する。また、学習指導要領の性に関する指導の内容や都道府県の指針を踏まえて、保健部の中で問題提起を行う。その他、教科教育や特別活動などにおいて個々の教員が取り組んできた情報をまとめて、学校の全教育活動における性教育の年間指導計画を作成するための提案を行う。

その結果を職員会議に提起し、検討を行い全校レベルの活動に移行する。

ここで、職員会議で承認を得るためには、実効性のある計画と実施後の実りある結果を提示することは第一条件であるものの、それに加えて、「根回し」も必要となる。ここでも養護教諭をバックアップする方策として、第 2 段階で培ったインフォーマルな関係性を活用し、プロモーターの力を借りることが成功のカギとなる。

そして、全校生徒の調査結果を地域や、全国の調査等と比較し、資料を作成する。結果は保健部会で検討をして、職員会議で報告し、同時に、職員研修に関する準備を進める段階でも、インフォーマルな連携メンバーの力も借りる。また、校外連携者の情報も確認する。生徒や保護者へは保健だより等で結果を紹介する。また、学校保健委員会のテーマとして性教育を取り上げ、委員会メンバーにも協力を依頼する。この段階まで進むことによって性教育の活動については多くの材料が揃い、年間指導計画案を作成する準備が整うことになる。

表10 養護教諭の性教育推進における段階別進捗度表

プロセス	養護教諭	校内連携・協力者	関連教員担当	連携作り合期等	校外連携	備考
第1段階：個人の気づき	① 教壇に立つべく 教壇登壇準備					①
第2段階：行動化のための能力の獲得	② 養護の認知 ・個人、グループ ・社会時状況	② インフォーマルな 連携先地へ連携、 研修内容・活動 の共有				②
第3段階：関係性の構築	③ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	③ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	③ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	③ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	③ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	③
第4段階：関係性の定着	④ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	④ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	④ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	④ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	④ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	④
第5段階：関係性の持続	⑤ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑤ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑤ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑤ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑤ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑤
第6段階：関係性の発展	⑥ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑥ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑥ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑥ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑥ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑥
第7段階：関係性の評価	⑦ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑦ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑦ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑦ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑦ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑦
第8段階：関係性の活用	⑧ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑧ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑧ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑧ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑧ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑧
第9段階：関係性の共有	⑨ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑨ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑨ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑨ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑨ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑨
第10段階：関係性の継承	⑩ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑩ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑩ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑩ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑩ 関係性構築 ・関係性構築 ・関係性構築	⑩

「進行表」活用に向けた検討

進行表の活用に向けて実証的に検証を進めるために、実際に各校の現状を記入していただき、使い勝手や有用性について確認することを目的に、次のような予備調査を試みた。

<調査対象>

「高等学校における性教育に関する意識と実態」に関する本調査において、第2次調査の協力で了解が得られていたA・B2県の養護教諭16名を対象とした。

<調査方法>

無記名自記式質問紙調査を実施した。

調査に当たっては、各県の学校保健関連の研究会後に、該当者に説明を行う場を設けて質問紙と説明書を配布し、質問紙は持ち帰って記入する方法をお願いし、記入後は郵送での回収を依頼した。調査期間は、2013年11月～12月である。

<調査内容>

- ア 対象者の属性（本調査と同じ）
勤務する学校種、生徒数、年代、勤務年数、性別、職種
- イ 進行表の各段階の項目ごとに（ ）を設け、実施済みの項目（ ）実施中（ ）実施予定や計画段階（ ）実施予定なし（×）の4件方で記載を求めた。
- ウ 自由記述欄

<集計と分析>

実施済みの項目（ ）実施中（ ）実施予

定や計画段階（ ）実施予定なし（×）の項目毎に単純集計し、回収数に対する割合を求めた。

<結果と考察>

回収16名（回収率100%）調査項目に記載漏れや分析に支障があるものは見られなかった。結果は、第1段階 養護教諭の気付きは、すべて実施済み（ ）と実施中（ ）であった。その後第二段階と第三段階前半の ～ は実施中（ ）と実施予定や計画段階（ ）で占められていた。ただし、調査に関する内容に対しては実施予定なし（×）が多く見られ、調査に対する躊躇や困難さを持っていることがうかがわれた。

次に第三段階の後半、～ 学校全体の組織への行動化については、実施予定なし（×）が多くを占めていた。の保健部会などにおいては組織へのかかわりは実施できているも、学校全体の組織への働きかけについては困難感を持つ状況がうかがわれた。ただし、保護者への紹介や 保健だよりなどで調査結果提示については、実施中（ ）と実施予定や計画段階（ ）が多く、日常的に行っている養護活動については実施に対する行動化が上手く行われている状況がうかがわれた。また、進捗表作成当初、性教育における継続と定着化のために、最終的な到達点として考えた年間計画の作成については、実施予定なし（×）は少なく、今後作成を進めていくことに期待が持てることをうかがわせた。なお、自由記述欄には「進捗表は組織的に動く目安となる」「性教育だけでなく、他の健康教育にも活用できる」などの記載が見られた。

以上のように、今後、より広範囲な調査を行い効果の確認が必要と考えられるものの、予備調査においては進捗表の各項目の位置は、おおむね妥当な状況にあり、一部の項目位置などを検討することで、効果的な活用が可能であることが示唆された。

(5) 結論

本研究では、高等学校において養護教諭の有する資質と能力を十分に発揮できるよう、「養護教諭の性教育推進における段階別確認表」の活用を提起し、全校の組織活動の活性化や拡大への方策を示した。

養護教諭が校内で、インフォーマルな関係性を活用しながら、性教育を段階的、組織的にコーディネートする活動として定着させ、性教育が継続できるように「養護教諭の性教育推進における段階別確認表」を作成して、そのプロセスを目に見える形(可視化)で示した。この進捗表の活用により、養護教諭自身の推進段階における自己チェックが可能となり、たとえば、予備調査で養護教諭の困難感がうかがわれた、調査の実施における必要性への気付きや動機付け、学校全体組織への働きかけのための方策を探る判断材料とすることができ、高等学校における性教育の推進に寄与すると考えている。

<引用文献>

鹿間久美子、岩崎保之、中村千景、時田詠子、佐光恵子：「高等学校における養護教諭の性教育推進に向けた方策に関する研究～調査結果を基にした『性教育推進における段階別確認進捗度表』の作成～」、日本思春期学会、思春期学、Vol.32/ No.4, 2014/12、388-403

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

鹿間久美子、岩崎保之、中村千景、時田詠子、佐光恵子、高等学校における養護教諭の性教育推進に向けた方策に関する研究～調査結果を基にした「性教育推進における段階別確認進捗度表」の作成～、日本思春期学会、査読あり、思春期学、Vol.32/ No.4, 2014/12、388~403

Keiko Sako, Hiromitsu hinozaki, Chikage Nakamura, Eiko Tokita, Yasuyuki Iwasaki, Chiharu Aoyagi, Kumiko Shikama

Feelings of Distress and Challenges Faced by High School Teachers When Implementing Sex Education, 日本思春期学会、査読あり、「思春期学 ADOLESCENTOGY」Vol.32/ No.1, 2014/03、188~196

宮内彩・佐光恵子・鈴木千春・鹿間久美子・篠崎博光、思春期における性教育としてのピアエデュケーションに関する研究動向、日本思春期学会、査読あり、思春期学 Vol.31/ No.2, 2013、243~251

〔学会発表〕(計 10 件)

中井美希、青柳千春、佐光恵子、鹿間久美子、女子大学生の自尊感情と避妊行動との関連性の検討、日本思春期学会 2015年8月29日~8月30日滋賀県

佐光恵子、青柳千春、時田詠子、鹿間久美子、養護教諭と助産師等の医療専門職との連携に焦点を当てた高等学校における性教育の成果と課題、日本思春期学会 2015年8月29日~8月30日滋賀県

鹿間久美子、高等学校の実情に即した性教育プログラムにおける効果の検討～自尊心と対人関係能力の向上を目指して～、第34回日本看護科学学会ワークショップ(招待講演)、2014年11月29日~11月30日、名古屋国際会議場

鹿間久美子、岩崎保之、中村千景、時田詠子、青柳千春、篠崎博光、佐光恵子、「養護教諭の性教育推進における段階別確認進捗度表」活用に向けた検討、日本思春期学会、2014年8月30日~8月31日つくば国際会議場

佐光恵子、篠崎博光、鹿間久美子、高等学校における性教育を実施するうえで教員が感じている困難感と課題、日本思春期学会、2013年8月31日~9月1日、和歌山

鹿間久美子、岩崎保之、中村千景、時田詠子、青柳千春、篠崎博光、佐光恵子、高等学校養護教諭の性教育に関する意識

と実態調査の検討～養護教諭が校内連携者に選択した保健体育科等教諭との比較から～、日本思春期学会、2013年8月31日~9月1日、和歌山

藤倉裕子・佐光恵子・篠崎博光、中学校保健体育教員による性教育に関する認識と医療従事者に対する支援ニーズ、日本思春期学会、2012年09月01日~2012年09月02日、軽井沢プリンスホテル
宮内彩・佐光恵子・鈴木千春・鹿間久美子・篠崎博光、ピアエデュケーションによる性教育の有効性についての文献検討
日本思春期学会、2012年09月01日~2012年09月02日、軽井沢プリンスホテル

鹿間久美子、佐光恵子、性教育の集団指導における効果の再現性に関する検討、日本思春期学会、2012年09月01日~2012年09月02日、軽井沢プリンスホテル

Kumiko Shikama, Yoshiro Hatano

Effects of sexuality education class instruction to senior high school students: Aiming at development of self-esteem and interpersonal relations

THE12TH ASIA-OCEANIA CONGRESS OF SEXOLOGY 2012
2012年08月02日~2012年08月04日
Kunibiki Messe

〔図書〕(計 1 件)

鹿間久美子、性教育を行うのは保護者ですか教師ですか～性教育の適格者と養護教諭の関係性に注目して～、心と体の健康、健学社 17/ 9、2013、68-72

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鹿間 久美子 (Shikama, Kumiko)
京都女子大学家政学部・教授
研究者番号：40589727

(2) 研究分担者

佐光 恵子 (Sakou, Keiko)
群馬大学医学部・教授
研究者番号：80331338

岩崎 保之 (Iwasaki, Yasuyuki)
新潟青陵大学 看護福祉学部・教授
研究者番号：60410247

時田 詠子 (Tokita, Eiko)
群馬医療福祉大学社会福祉学部・准教授
研究者番号：00612839

中村 千景 (Nakamura, Chikage)
帝京短期大学 生活科学部・講師
研究者番号：80623991